

教育研究業績書

2025年10月20日

所属：心理学科

資格：准教授

氏名：竹島 克典

| 研究分野 | 研究内容のキーワード |
|---------------|--------------------------------|
| 臨床心理学、発達臨床心理学 | 機能的アセスメント、社会的相互作用、子どもの抑うつ、発達障害 |
| 学位 | 最終学歴 |
| 博士（心理学） | 関西学院大学大学院 文学研究科 博士課程後期課程 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|-------------------------------|------------------|--|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| 1. 知識の定着を図る授業の実践 | 2022年4月～現在 | 授業内で定期的に小テスト等を実施し、思考力の向上や専門的知識の定着を図る実践をしている。 |
| 2. 学生授業評価アンケートの活用 | 2021年4月～現在 | 学生からの授業評価アンケートの結果に基づき、授業内容や進め方の改善を継続的に行っている。 |
| 3. プrezentation力と議論スキルのトレーニング | 2021年4月～現在 | 演習の授業では、問題についての根拠をもった主張と学生同士の質疑応答を重視した実践を行い、プレゼンテーションと建設的なコミュニケーションスキルの向上を図っている。 |
| 4. 双方向型の授業の実践 | 2021年4月～現在 | 授業の実施において、教員からの一方向的な働きかけだけでなく、学生からの質問や意見表明の機会を多く設定し、それに応答しながらディスカッション形式で進めている。 |
| 5. 視覚教材を活用した授業 | 2019年10月～現在 | パワーポイント等を用い、動画や画像を豊富に取り入れ、授業への動機づけを高める工夫を行っている。 |
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| 1. なるほど！心理学観察法(心理学ベーシック第4巻) | 2018年4月 | 北大路書房から出版された心理学研究法に関する初学者向けの教科書。第9章「グループデザインを用いた観察データの統計解析」と第13章「抑うつ症状を示す児童の対人行動」を担当した。 |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 1. 大学院生の臨床実践の指導 | 2023年4月～現在 | 武庫川女子大学大学院臨床心理学専攻学生の臨床ケースのグループスーパービジョンを担当し、ケースのアセスメントから見立て、支援の実践に関する指導を行っている。 |
| 2. 公認心理師実習の実習指導 | 2018年10月～2021年3月 | 公認心理師実習の実習指導者として、大学院生を対象に発達障害者支援センターの業務に関する実習を指導した。実習では、相談支援への陪席や現場職員との議論を通して、対象者への配慮や支援計画の立案と実行、機関連携等を学べるよう指導をした。 |
| 4 その他 | | |
| 1. オープンキャンパス 模擬授業担当 | 2023年6月25日 | 心理学の多様さと考え方について、日常生活の身近な経験との結びつきから説明し、心理学の魅力が伝わるように体験授業を行った。 |
| 2. オープンキャンパス 模擬授業担当 | 2022年8月12日 | 心理学の多様性と面白さを伝えるための体験授業を実施した。 |
| 3. 心理・社会福祉学科 クラス担任 | 2022年4月～現在 | 2022年度は大心1年、2023年度は大心2年を担当している。初期演習に加えて、履修状況・学生生活相談・進路指導等の指導・サポートを個々の学生に実施している。 |
| 4. 高大連携事業・入学期前教育担当 | 2022年2月 | 入学期前教育において、生徒たちによる調べ学習の成果発表について指導した。 |
| 5. オープンキャンパス 模擬授業担当 | 2021年9月26日 | 心理学が持つ多様さと魅力を伝えるための体験授業を実施した。 |

| 職務上の実績に関する事項 | | |
|-------------------|------------|--|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 資格、免許 | | |
| 1. 公認心理師(第24259号) | 2019年4月8日 | 公認心理師法に基づく心理職国家資格 |
| 2. 社会福祉施設長資格 | 2019年3月31日 | 全国社会福祉協議会による「社会福祉施設長資格認定講習課程」を修了(修了番号：18A2-0681) |
| 2 特許等 | | |

| 職務上の実績に関する事項 | | |
|--|------------|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 2 特許等 | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 1. 地域の児童発達支援事業所のコンサルテーション | 2023年4月～現在 | 社会福祉法人博愛社が運営する児童発達支援事業所への継続的なコンサルテーションを行い、発達障害のある就学前の児童への発達支援について専門的な助言や効果検証を行っている。 |
| 2. 西宮市人権教育推進課主催 人権学習会 講師 | 2023年1月16日 | 一般の地域住民を対象に、「発達障害と不登校」というテーマで発達障害の特性の理解や不登校の支援に関する講義を行った。また、講演内容について市民を対象に動画の配信がなされた。 |
| 3. 西宮市教育委員会「こころの教育」研究グループ アドバイザー | 2022年8月～現在 | 西宮市教育委員会と市内の小中学校の教諭で構成される研究グループにアドバイザーとして参加し、エビデンスに基づく子どもの発達の理解や支援を要する子どもへの対応助言および研修等を継続的に行っている。 |
| 4. 福祉現場におけるメンタルヘルス検討会構成員 | 2022年6月～現在 | NPO法人大阪障害者センター主催の検討会にて、障害者福祉の支援従事者のメンタルヘルスに関する議論や研修の実施を行っている。 |
| 5. 西宮市人権教育推進課主催 人権学習会 講師 | 2021年9月6日 | 一般の地域住民を対象に、「発達障害と不登校」というテーマで発達障害の特性の理解やコミュニケーション上の配慮、不登校の支援についての講義を行った。 |
| 6. 一般財団法人子供の城協会主催 障がい児教育夏季連続講座 講師 | 2021年7月18日 | 幼稚園教諭や保育士等を対象として、発達の気になる子どもを持つ保護者と支援者のコミュニケーションについて研修を実施した。 |
| 7. 地域の放課後等デイサービス事業所のコンサルテーション | 2021年4月～現在 | 社会福祉法人希望の家が運営する放課後等デイサービス事業所の継続的なコンサルテーションを行い、発達障害のある児童への発達支援やスタッフトレーニング、学校連携等について専門的な助言や効果検証を行っている。 |
| 8. 社会福祉法人いたみ杉の子主催 令和2年度ウェビナー 発達障害学生とその傾向を持つ学生の就労支援 講師 | 2020年7月16日 | 大学のキャリアセンターや学生相談等の支援従事者を対象としたウェビセミナーにおいて、発達障害特性の理解や大学の就職支援の中で必要な配慮、サポートの方法、地域連携等について解説し、意見交換を行った。 |
| 9. 西宮市教育委員会主催 人権学習会 講師 | 2019年5月30日 | 一般の地域住民を対象に、「発達障害の理解を深める」というテーマで発達障害の特性の理解やコミュニケーション上の配慮、ライフステージにわたる支援についての講義を行った。 |
| 10. 東洋食品工業短期大学 教職員研修会 講師 | 2019年3月6日 | 教職員を対象に「発達障害のある学生への支援・対応について」というテーマで、大学における発達障害特性の理解と支援について講義を行い、学内支援体制や保護者対応等についての意見交換を行った。 |
| 11. 地域包括・在宅介護支援センター阪神ブロック研修会 講師 | 2018年9月26日 | ケアマネジャー等の高齢福祉の支援者を対象に、成人期の発達障害の特性やコミュニケーション上の配慮等について解説し、「80-50問題」に関わる実践上の課題についてグループワークを通してディスカッションを行った。 |
| 12. 宝塚市自主研究会「みんなの特別支援教育」講師 | 2018年8月28日 | 宝塚市内の特別支援学校、通常の小中学校の教師を対象に「応用行動分析の視点で考える特別支援教育」というテーマで講義を行い、事例を通して応用行動分析に基づいた支援の考え方について意見交換を行った。 |
| 13. 産業技術短期大学 FD研修 講師 | 2018年8月7日 | 教員を対象に、大学における発達障害特性の理解と支援について講義を行い、授業内での配慮や保護者対応、学内支援体制等についての意見交換を行った。 |
| 14. 兵庫県委託事業 発達障害者の相談支援基礎講座－大人の発達障害の理解と相談支援のポイント（講義＋ワークショップ） 講師 | 2018年5月24日 | 阪神北圏域（宝塚・伊丹・三田・川西・猪名川）の障害者への相談支援従事者を対象に、成人期の発達障害者に相談支援を行う際の、基本的な特性理解やコミュニケーション上の配慮について講義とロールプレイ等の演習を組み合わせた研修会を実施した。 |
| 15. 兵庫ひきこもり地域支援センター阪神ブランチ 地域相談会 講師 | 2018年2月17日 | 一般の地域住民、ひきこもり状態にある子を持つ親等を対象に「発達障害とひきこもり」というテーマで講 |

| 職務上の実績に関する事項 | | |
|--|-----------------------|--|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 16.伊丹市障がい者福祉市民講演会 講師 | 2017年12月6日 | 演を行った。家族支援の方法について解説し、講演後の個別相談会において相談支援を行った。 一般の地域住民や支援関係者等を対象として、成人の発達障害当事者との協働(講義の分担、対談)で、発達障害者への配慮・サポートの仕方や多様性の中で発達障害を理解していくことの重要性を訴えた。 |
| 17.川西市民生委員・児童委員連合会研修会 講師 | 2017年7月31日 | 川西市の民生・児童委員を対象に、発達障害特性の理解とサポートの仕方についての基本的事項の説明を行い、地域の中での見守りや、民生・児童委員ができること等についての意見交換を行った。 |
| 18.猪名川町子育て支援センター ボランティア養成講座 講師 | 2017年5月 | 猪名川町の子育て支援センターの職員、託児ボランティア等を対象に、発達障害のある子どもの行動の理解の仕方や関わり方について講義を行った。 |
| 19.社会福祉士会 阪神ブロック研修会 講師 | 2017年1月27日 | 阪神地域の社会福祉士を対象に、発達障害の理解と支援に関する基本的な解説を行い、具体的な事例を通して多領域の連携による支援の在り方等について意見交換を行った。 |
| 20.兵庫県川西子ども家庭センター主催 北摂・丹波地区里親会総会 講師 | 2016年6月16日 | 北摂・丹波地区の里親と児童養護関係の支援者を対象に発達障害のある子どもの特性や行動の理解、関わり方について講義を行った。 |
| 21.神戸保護観察所主催 保護者会 講師 | 2016年2月12日 | 神戸保護観察所の保護者会に属する保護者、保護観察官、保護司を対象に発達障害のある子どもの特性や行動の理解、関わり方について講義を行い、触法行為のあった事例における支援についても紹介した。 |
| 22.就労移行支援事業所ハピネス川西 職員研修 講師 | 2015年1月27日～2015年3月24日 | 就労移行支援事業所の職員を対象に、成人期の発達障害の基本的理解について講義を行い、事業所の事例検討を通して、具体的な支援についての意見交換、支援計画づくりを行った(全3回)。 |
| 23.三田市民生委員・児童委員連絡協議会 講師 | 2014年11月28日 | 三田市の民生・児童委員を対象に、発達障害特性の理解とサポートの仕方についての説明を行い、地域の中での見守りや、民生・児童委員ができること等についての意見交換を行った。 |
| 24.兵庫県立川西北稜高等学校 教職員研修 講師 | 2013年10月18日 | 高校教職員を対象に、発達障害の特性や思春期青年期の行動についての基本的事項を解説し、高等学校における支援について意見交換を行った。 |
| 25.伊丹市障害者地域自立支援協議会 発達障がい支援検討会 委員 | 2013年6月～2021年3月 | 伊丹市の発達障害児・者への支援における地域課題の抽出、市内の福祉関係の支援者や地域住民等に対する研修の企画立案から実施等に携わった。 |
| 26.猪名川町要保護児童対策協議会代表者会 研修会 講師 | 2012年6月28日 | 要保護児童対策協議会の委員を対象に、発達障害と虐待との関わりについての知見をまとめた説明を行い、虐待予防としての保護者支援と早期からの発達支援の重要性を示した。 |
| 27.宝塚市立中山桜台小学校 教員研修 講師 | 2011年8月25日 | 小学校教職員を対象に、発達障害特性を理解するための解説、通常学級の中で配慮を要する児童に対してどのようなサポートができるか、講義と意見交換を行った。 |
| 28.発達障害者支援センター(ひょうご発達障害者支援センター クローバー 宝塚プランチ)における心理臨床実践 | 2010年7月1日～2021年3月31日 | センターの開設から従事し、発達障害児・者、家族、関係機関の支援者等を対象に相談支援、発達支援、就労支援、普及啓発・研修を行った。また、関係機関へのコンサルテーションやペアレントトレーニングの実践を行った。 |
| 29.こうべ学びの支援センター 専門相談員 | 2009年4月～2010年6月 | 通常の学級に在籍し、学習や生活などに困難さがあり、発達障害及びその可能性のある児童生徒が対象に心理検査等のアセスメントを行い、学校へのコンサルテーションをあわせて実施した。 |
| 30.大阪府すこやか家族再生事業「ソーシャルスキルトレーニング開発」トレーナー（関西学院大学受託研究事業：研究代表者、松見淳子） | 2008年6月1日～2009年3月31日 | 研究チームの一員として、児童自立支援施設(大阪府子どもライフサポートセンター)の入所者を対象としたSSTプログラムの開発、グループSSTの実施に携わった。 |
| 31.神戸市「通常の学級におけるLD等への特別支援事 | 2004年4月～2009年3月 | 教員補助者として、神戸市の小学校の通常学級に在籍 |

| 職務上の実績に関する事項 | | | |
|------------------------------|-----------------|---|--|
| 事項 | 年月日 | 概要 | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | | |
| 「業」教員補助者 | | する教育的配慮を要する児童の学習サポート、仲間関係のサポート等を教員との協働により行った。 | |
| 4 その他 | | | |
| 1. 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要 編集委員 | 2023年4月～現在 | 研究所の紀要の編集委員として編集会議に参加し、査読体制や刊行等に関する検討を行っている。 | |
| 2. 公認心理師実習担当 | 2023年4月～現在 | 心理学科および臨床心理学専攻の公認心理師養成にかかる実習に関して、学外実習施設との連携、学内の指導体制の整備、学生への対応等の調整を担当している。 | |
| 3. 兵庫県立御影高校 模擬授業(出張講義) 講師 | 2022年10月13日 | 高校2年生を対象に「心理学への招待」というテーマで、心理学の多様な領域と日常生活の経験との結びつきについて授業を行った。 | |
| 4. 武庫川女子大学教育研究所 研究員 | 2022年4月～現在 | 研究員として、縦断研究のデータ解析や西宮市教育委員会と連携した学校支援プロジェクトの実施に携わっている。 | |
| 5. 教学局 共通教育委員 | 2022年4月～現在 | 共通教育委員会に出席するとともに、共通教育懇談会においてファシリテーターを担当した。また、2022年度は特別学期スケジュール・プログラムについて心理領域の調整を担当した。 | |
| 6. 大阪万博推進委員 | 2021年9月～現在 | 大阪万博における本学の連携に関して、学科内の連絡・調整を行った。 | |
| 7. 臨床系カリキュラム ワーキンググループ | 2021年8月～2022年7月 | 公認心理師養成にかかる臨床系科目の構成と、養成課程について議論し、新学科および大学院のカリキュラム変更について検討した。 | |
| 8. 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所 研究員 | 2021年4月～現在 | 研究員として臨床実践研究、インターク会議への参加、その他研究所運営業務に携わっている。 | |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---------|-----------|---------------------|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| 1. 認知行動療法事典 | 共 | 2019年9月 | 丸善出版 | 日本認知行動療法学会 編集 担当部分：「子どもの抑うつの支援」， pp. 404-405. 児童・青年期の抑うつについて、基本的な概念の説明、エビデンスに基づく心理社会的介入を導く認知行動モデルと具体的な介入要素についての知見を概観し、分野における課題を示した。 |
| 2. なるほど！心理学観察法(心理学ベーシック第4巻) | 共 | 2018年4月 | 北大路書房 | 三浦麻子 監修、佐藤寛 編著 担当部分①：第9章「グループデザインを用いた観察データの統計解析」， pp. 118-130 心理学研究法において、グループデザインを用いた観察データを取り扱う際の、データの集計方法から基本的な統計解析についての解説を行った。 担当部分②：第13章「抑うつ症状を示す児童の対人行動」， pp. 154-160. 抑うつを示す児童の行動観察研究を紹介し、データの収集方法や仲間同士の相互作用の分析方法などについて解説を行った。 |
| 2 学位論文 | | | | |
| 1. 対人・行動的アプローチを基盤とした児童期の抑うつに関する心理学的研究 | 単 | 2016年2月 | 博士論文(関西学院大学) | 対人・行動的アプローチを基盤として児童の抑うつと社会的相互作用の関連を実証的に検討した。学校場面において児童を対象とした縦断的調査や社会的相互作用の行動観察によるアセスメント研究を行い、社会的環境にアプローチする新たな抑うつへの介入計画を構築し、実践した。児童の抑うつを対人的文脈の中で理解し、環境との相互作用に焦点当てた支援の重要性を示した。 |
| 3 学術論文 | | | | |
| 1. 放課後等デイサービススタッフのSST支援技術に対する実践に基づくコーチング法の効果<査読付> | 共 | 2023年9月 | 自閉症スペクトラム研究 第21巻第1号 | 竹島克典・田中善大 放課後等デイサービス事業所の支援スタッフに対して、実践に基づくコーチング(practice-based coaching: PBC)を行い、SST支援技術に及ぼす効果について検討した。PBCによるコーチングの結果、支援スタッフのSST支援技術が向上し、介入も受容性の高いものであることが示された。実践現場における支援の専門性向上の方法について |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---------|------------|---------------------------------------|--|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 3 学術論文 | | | | |
| 2. 福祉分野における発達支援の質の向上と連携 | 単 | 2023年5月25日 | LD研究 第32巻2号 | 考察を行った。(pp.15-24) 日本LD学会 第31回大会(大会企画シンポジウム：well-beingの視点から見た教育・医療・福祉のこれから、鈴木英太・佐藤美幸・船曳康子・田端順子・竹島克典・花熊曉)にて行った話題提供をまとめたもの。福祉分野の発達支援において、支援者の専門性を向上させ支援の質を高めることと、その専門性に基づいて医療や教育の支援者と「具体性・継続性・相互性」のある連携・協働をすることが子どものwell-beingの実現に重要であることを論じた。(pp.73-75) |
| 3. 児童思春期におけるQOLの発達軌跡の検討 | 共 | 2023年 | 武庫川女子大学教育研究所 研究レポート | 竹島克典・難波久美子・河合優年 児童期から青年期までのQOLに関する7年間の縦断データの分析から、発達軌跡と個人差の検討を行った。その結果、QOLの領域ごとに異なる変化の軌跡を示すこと、多くの領域において変化の軌跡が非線形であり、変化の軌跡に有意な個人差がみられること、変動係数が思春期・青年期にかけて増加することが明らかになった。(pp.68-80) |
| 4. 子どもの抑うつの機能的アセスメント—具体的な相互作用を文脈の中でとらえる | 単 | 2022年7月 | 臨床心理学 Vol.22, No.4 (金剛出版) | 子どもの抑うつの問題について、機能的アセスメントの観点から分析し考察した。子どもと社会的環境との具体的な相互作用を多層的な文脈に位置づけてとらえ、その機能的関係を明らかにすることで、エビデンスに基づく介入の有効性をより高める方略を計画できる可能性を指摘した。(pp.461-467) |
| 5. 社会的相互作用におけるコアーションと子どもの不適応行動の発達に関する予備的検討<査読付> | 単 | 2022年3月31日 | 人間学研究 第34号 (武庫川女子大学人間学研究会) | 社会的相互作用におけるコアーションの概念検討および主要な実証的研究のレビューを行い、子どもの不適応行動の発達を解明する上で、子どもと親や仲間とのコアーシブな相互作用を行動観察に基づき詳細に検討することの重要性を指摘した。特に、子どもの不適応の問題に関して、これまでコアーションと反社会的行動などの外在化問題との関連が示されてきたが、子どもの抑うつといった内在化問題への応用可能性について論じ、今後検討されるべき実証的な課題を明らかにした。(pp.24-33) |
| 6. 児童の抑うつ症状に対する学級規模のPositive Peer Reportingと集団随伴性の効果—社会的環境へのアプローチの試みー <査読付> | 共 | 2019年12月 | 認知行動療法研究 Vol. 45, No. 3 (日本認知・行動療法学会) | 竹島克典・田中善大 児童(小学5年生)の抑うつ症状を低減させることを目的として、肯定的な仲間報告(PPR)と相互依存型集団随伴性の組み合わせによる介入プログラムをクラス単位で実施し、効果の検証を行った。介入プログラムの事前と事後の比較から、児童の抑うつ症状の有意な低減が示された。最後に、児童の抑うつに対する介入研究における社会的環境へのアプローチの有効性と今後の課題について考察した。(pp.115-123) |
| 7..[第14回日本認知療法学会シンポジウム]教育現場における実践の課題と工夫：行動的アプローチからの示唆 | 共 | 2015年7月 | 認知療法研究 Vol.8, No.2 (日本認知療法学会) | 本岡寛子・大対香奈子・竹島克典・三田村仰・加藤敬 「教育現場における児童の抑うつへの対人・行動的アプローチ」の執筆を担当した。児童の抑うつと対人関係要因(孤立、ストレス、サポート、仲間関係、コーピング)との関連を実証研究から示し、児童の適応行動が効果的に機能する社会的環境づくりの実践研究を紹介した。これらから、行動的アプローチの重要性を示した。(pp.189-198) |
| 8. 児童期の抑うつと対人関係要因との関連：コーピング、ソーシャルサポート、仲間関係、対人ストレッサーに焦点をあてた前向き研究 <査読付> | 共 | 2015年6月 | 発達心理学研究 Vol.26, No.2 (日本発達心理学会) | 竹島克典・松見淳子 児童の抑うつ症状と対人関係要因(対人ストレッサー、コーピングスキル、ソーシャルサポート、仲間関係)の関連を前向き調査研究によって検討した。対象児は4年生の児童108名で、第一回目の調査から9ヶ月後に再び追跡調査を行った。その結果、撤退型コーピング、母親サポート、および対人ストレッサーとコーピングスキルの交互作用が後の抑うつ症状を有意に予測することが明らかになった。(pp.158-167) |
| 9. 抑うつ症状を示す児童の仲間との社会的相互作用：行動観察に基づくアセスメント研究 <査読付> | 共 | 2013年6月 | 教育心理学研究 Vol.61, No.2 (日本教育心理学会) | 竹島克典・松見淳子 抑うつ症状を示す児童の仲間との社会的相互作用を学校場面で行動観察した。その結果、抑うつを示す児童は孤立することが多いことが明らかになった。相互作用の分析からは、抑うつを示す児童はグループ場面において孤立・引っ込み思案行動が多く、仲間とのポジティブなやり取りが少ないことが明らかになった。さらに、抑うつ児の孤立・引っ込み思案行動の下では仲間の攻撃行動が起こりにくいという行動間の機能的関係が明らかになった。(pp.11-18) |

| 研究業績等に関する事項 | | | | | | |
|---|---------|----------------------|---|--|--|--|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 | | |
| 3 学術論文 | | | | | | |
| 10. 日本語版SLAQの作成 ：学校適応の規定要因および抑うつの関連の検討 <査読付> | 共 | 2013年 | 日本学校心理士会 年報 Vol.6 (日本学校心理士会) | 158-168) 大対香奈子・堀田美佐緒・竹島克典・松見淳子 児童の学校肯定感・回避感を測定する質問紙SLAQの日本語版を作成し、信頼性と妥当性の検討を行った。また、児童の学校肯定感・回避感を規定する要因と抑うつ症状との関連を検討した。その結果、日本語版SLAQの信頼性と妥当性が確認された。規定要因については、学校肯定感に対して「友人関係」が最も強く関連することが明らかになった。抑うつ症状は、学校肯定感と負の相関関係を示し、学校回避感とは正の相関関係を示した。(pp.59-69) 竹島克典・松見淳子 | | |
| | | | 人文論究 Vol.57, No.3 (関西学院大学人文学会) | 子供の抑うつと対人・行動的アプローチに基づいた行動アセスメント研究を中心に概観した。これまでに行われた実証研究のレビューにより、子供の社会的相互作用と抑うつの間に密接な関連があることが明らかになった。また抑うつに対する心理社会的介入においては、対人・行動的アプローチに基づく社会的相互作用の分析から、子供個人のスキルだけでなく社会的環境要因をも射程に入れた支援方法の必要性が示された。(pp.61-81) | | |
| その他 | | | | | | |
| 1. 学会ゲストスピーカー | | | | | | |
| 1. 発達障害者支援センターにおける保護者支援と学校連携 | 単 | 2018年9月 | 日本特殊教育学会 第56回大会 自主シンポジウム(大阪国際会議場) | 企画者：岡村章司・井澤信三(兵庫教育大) 話題提供者：温泉美雪・竹島克典・藤野泰彦 「行動障害に対する保護者支援の現状と課題」 発達障害者支援センターにおける保護者支援やペアレントトレーニング等の実践について紹介し、学齢期の子を持つ保護者支援に不可欠となる学校との連携についても焦点を当て、支援の実際と課題を検討した。福祉分野において学校連携を考える際に、個別の当事者間(保護者と教師、支援者と教師)や組織間等の様々なレベルにおいて、相互に役割を理解し、具体的な支援を通して主体的なコミュニケーションを行うことの必要性について論じた。 | | |
| 2. 子どもの抑うつに対する対人・行動的アプローチ | 単 | 2007年9月 | 日本心理学会第71回大会 ワークショップ(東洋大学) | 企画者：佐藤寛・石川信一(宮崎大学) 話題提供者：竹島克典・大島由之・小関俊祐・佐藤寛 「子どもの抑うつに対する認知行動的アプローチ—基礎研究と実践研究のインターフェース—」子供の抑うつに対する対人・行動的アプローチの概要、対人・行動的アプローチに基づく社会的相互作用のアセスメント研究、心理社会的介入への示唆を発表した。子供の抑うつに対するアセスメント研究において、社会的相互作用の詳細な分析を行うことによって、認知行動療法を基盤とした介入に対しても新たな示唆を得ることができる点について指摘した。 | | |
| 2. 学会発表 | | | | | | |
| 1. 親子相互交流療法(PCIT)介入前後の親子相互作用の変化② ：ダイナミックシステムズ・アプローチに基づく変化のプロセスの予備的検討 | 共 | 2024年3月8日 | 日本発達心理学会 第35回大会 ポスター発表 (大阪国際交流センター) | 竹島克典・新澤伸子・茂木由紀・細川亜希 親子相互交流療法による親子の相互作用の質的な変化について、行動観察法により内容と構造に焦点をあてて探索的に検討した。その結果、親子の相互作用に質的な変化がみられ、PCITモデルを支持した。同時に、親子の相互作用の変化のプロセスには、ケースごとに個別性がある可能性が示された。これらについて、ダイナミックシステムズ・アプローチの観点から考察した。 | | |
| 2. 福祉分野における発達支援の質の向上と連携 | 単 | 2022年10月30日 | 日本LD学会 第31回大会 大会企画シンポジウム「Well-beingの視点から見た教育・医療・福祉のこれから」(京都、国立京都国際会館) | 福祉領域における障害のある子どもへの発達支援について、専門性の向上のための実践的研究について話題提供を行った。また、学校を中心とした子どもの生活現場に支援が行き渡るようにするための具体的な支援者間の連携について議論を行った。 | | |
| 3. 福祉領域での実践と研究活動 | 単 | 2022年10月 オンデマンド配信 | 日本認知・行動療法学会 第48回大会 編集委員会企画シンポジウム「研究活動のダイバーシ | 福祉領域における臨床実践に専任として長く従事しながら研究活動を続けてきた経験について話題提供を行い、研究活動におけるキャリアパスの多様性に関して議論した。 | | |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|--|---------|-------------|--|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 2. 学会発表 | | | | |
| 4. 放課後等デイサービスにおけるPBCに基づくスタッフ・トレーニングプログラムが児童指導員のSST支援技術向上におよぼす効果の検討 | 共 | 2021年10月10日 | ティ－持続可能な論文執筆に向けて－（宮崎、シーガイアコンベンションセンター）日本認知・行動療法学会第47回大会ポスター発表（オンライン開催） | 竹島克典・田中善大 放課後等デイサービスの支援スタッフ1名を対象に、実践に基づくコーチング(PBC)によるスタッフ・トレーニングプログラムを実施し、支援技術におよぼす効果を検討した。その結果、PBCスタッフ・トレーニングプログラムは、支援スタッフのSST実施に必要な支援技術を向上させることができた。 |
| 5. 放課後等デイサービスにおけるチーム主導型問題解決(TIPS)モデルの導入と有効性の検証 | 共 | 2021年8月 | 日本自閉症スペクトラム学会 第19回大会 ポスター発表（オンライン開催） | 竹島克典・田中善大 放課後等デイサービスの発達支援の質を向上させるために、チーム主導型問題解決(TIPS)モデルを事業所に導入し、支援スタッフおよび利用児童への有効性を検討した。本研究の結果、TIPSの導入により支援スタッフの発達支援の継続的改善が行われるようになり、児童のソーシャルスキル向上を促進させる可能性が示された。 |
| 6. Effects of Classwide Positive Peer Reporting and Group-Oriented Contingency on Depressive Symptoms in Japanese Children | 共 | 2017年11月 | Poster presented at the 51th annual meeting of Association for Behavioral and Cognitive Therapies (San Diego, USA) | Takeshima, K., & Tanaka, Y. 児童(小学5年生)の抑うつ症状を低減させることを目的として、肯定的な仲間報告(PPR)と相互依存型集団随伴性の組み合わせによる介入プログラムをクラス単位で実施した。介入プログラムの事前と事後を比較した結果から、児童の抑うつ症状の有意な低減が示された。最後に、抑うつの対人モデルに基づいて、児童の抑うつに対する介入研究における社会的環境へのアプローチの有効性と今後の課題について考察した。 |
| 7. 障害者支援施設職員のスキルアップ研修－発達障害者の理解と支援を通して－ | 単 | 2013年7月 | 第37回全国身体障害者施設協議会研究大会 口頭発表(鹿児島 城山観光ホテル) | 障害者の入所支援施設の職員80名を対象に、発達障害の理解と支援に関する合計4回の施設内研修を行い、職員の支援スキルに対する効果を検討した。研修内容には、支援対象者の特性のアセスメント、個人と環境との相互作用の理解、環境調整を含めた支援方法などが含まれた。その結果、支援対象者の特性のアセスメントと特性に合わせた支援方法を考えるスキルが向上したことが明らかになった。 |
| 8. Relationships between depressive symptoms and interpersonal factors in Japanese children: A prospective analysis | 共 | 2010年5月 | Poster presented at 2010 World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies (Boston, USA) | Takeshima, K., Oshima, K., & Tanaka-Matsumi, J. 児童の抑うつ症状と対人関係要因(対人ストレッサー、コーピングスキル、ソーシャルサポート、仲間関係)の関連を前向き調査研究によって検討した。小学4年生の児童を対象として、第一回目の調査から9か月後に再び追跡調査を行った。その結果、第一時点の抑うつ症状を統制した上で、撤退型コーピング、母親サポート、および対人ストレッサーが後の抑うつ症状を有意に予測することが明らかになった。 |
| 9. Assessment of the relationship between depressive symptoms and peer acceptance in Japanese children | 共 | 2007年5月 | Poster presented at 2007 World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies (Barcelona, Spain) | Takeshima, K., Mitamura, T., & Tanaka-Matsumi, J. 児童の抑うつ症状と仲間関係の関連を明らかにすることを目的に調査を行った。小学6年生の児童を対象に調査を行った結果、児童の抑うつ症状はソシオメトリック評定による仲間からの受け入れ度と親しい友人数との間に有意な負の相関関係を示した。また、臨床基準値を超える抑うつ症状を示した児童はそうでない児童と比べて、親しい友人が有意に少ないことが明らかになった。 |
| 10. Behavioral assessment and sequential analysis of peer interactions among depressed and nondepressed Japanese children | 共 | 2006年11月 | Poster presented at the 40th annual meeting of Association for Behavioral and Cognitive Therapies (Chicago, USA) | Takeshima, K., & Tanaka-Matsumi, J. 抑うつ症状を示す小学5、6年生の児童の仲間との社会的相互作用を学校場面で行動観察した。その結果、抑うつを示す児童は休憩時間において孤立することが多いことが明らかになった。グループの相互作用の分析の結果、抑うつ高群の児童は対照群の児童よりも、ポジティブな行動の相互交換が少ないことがわかった。また抑うつ高群の児童は、仲間のポジティブな働きかけに対して応答せず別の話をするなどの無視を示しやすいことが明らかになった。 |
| 11. 通常学級に在籍する発達障害児の授業参 | 共 | 2006年10月 | 日本行動療法学会 第32回大会ポス | 原説子・藤田昌也・竹島克典・松見淳子 通常学級に在籍する発達障害のある児童および配慮を要する児童の |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---------|----------------|---------------------------------------|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 2. 学会発表 | | | | |
| 加行動に関する機能的アセスメント | | | タ一発表 (東京きゆりあん) | 2名について、行動観察に基づく授業参加行動の機能的アセスメントを行った。行動観察では、対象児の課題従事行動と逸脱行動について、それぞれの先行状況と結果事象を含めて記録した。その結果、児童Aの逸脱行動に対しては他児童からの注目が起こりやすいことが示された。一方、児童Bの逸脱行動は課題を行う状況で起こりやすいことが明らかになった。 竹島克典・松見淳子 |
| 12. 抑うつを示す児童の社会的相互作用の行動観察 — Sequential analysisによる検討 — | 共 | 2006年9月 | 日本行動分析学会 第24回大会ポスター発表 (関西学院大学) | 抑うつ症状を示す5、6年生の児童の仲間との社会的相互作用を学校場面で行動観察した。その結果、抑うつを示す児童は自然場面である休憩時間において仲間との相互作用が少なく、独りで過ごすことが多いことが明らかになった。グループの相互作用の分析の結果、抑うつ高群の児童は対照群の児童よりも、ポジティブな働きかけをしたときに仲間からのポジティブな応答が起こりにくいことが明らかになった。 竹島克典・松見淳子・大竹恵子 |
| 13. 大学生の就職活動期におけるポジティブ・ネガティブな感情イベント | 共 | 2005年5月 | 日本感情心理学会 第13回大会ポスター発表 (名古屋大学) | 大学生の就職活動期に経験する感情イベントを収集し、双対尺度法によるカテゴリー分類からその内容を検討した。その結果、大学生が就職活動期に経験するポジティブなイベントとして「選考プロセス」、「自己の成長」、「対人サポート」に分類することができた。ネガティブイベントとしては、「選考プロセス」、「生活の変化に伴うストレス」、「進路決定・適正」に分類できることが明らかになった。 竹島克典・松見淳子 |
| 14. 失敗経験後の原因帰属を操作する教示がその後のパフォーマンスに及ぼす影響について | 共 | 2004年10月 | 日本行動療法学会 第30回大会ポスター発表 (中京大学) | 大学生を対象に、解決不可能な問題を含む課題をさせた後、原因帰属を操作する教示を行い、教示の内容によってその後の課題の正答率が異なるか検討した。その結果、教示群による正答率の有意な差はみられなかったが、失敗経験を内的に帰属しやすい認知スタイルの参加者に対して内的帰属を促す教示をした場合、その後の課題の正答率が低くなるという傾向が示された。 |
| 3. 総説 | | | | |
| 4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績 | | | | |
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| 1. 障がい児者よ！輝ける君の未来を願う！ 樹望：みんなで学ぼう “障がい福祉のABC” 100回達成記念誌 | 共 | 2020年6月 | 銀河書籍 | 特定非営利活動法人 樹望 編集 担当部分：「発達障害のある子どもを育てる家族支援の実践」,(pp. 181-183) 発達障害児者の支援課題における家族支援の問題、発達障害者支援センターが実践するペアレントトレーニング、地域展開としてのコンサルテーションについて報告を行った。 竹島克典・蓬萊元次 |
| 2. 見えない障害をどうとらえるか：発達障害者の就労支援 | 共 | 2014年4月 | 月刊福祉 2014年5月号 (全国社会福祉協議会出版部) | 表題について主張したい内容を書いた原稿を提出し、原稿に沿って受けたインタビューの内容が掲載された。記事では、①筆者の所属する社会福祉法人が発達障害者支援の事業を展開するようになった経緯、②現在の発達障害に関する支援の実践、③発達障害者支援の全国的な現状を述べた後、④発達障害者支援センターにおける成人の就労支援事例を基に、丁寧な相談支援の必要性と機関連携の課題について述べた。 竹島克典・蓬萊元次 |
| 3. 神戸市の特別支援教育における地域との連携と実践 | 単 | 2009年8月 | 第24回人間教育実践交流会2009神戸フォーラム、口頭発表 (神戸) | 神戸市で実施している特別支援教育に関して、発表者がかかわった実践を中心にその特徴を発表した。発表内容には、①大学との連携に基づいた「通常の学級におけるLD等への特別支援」事業、②アセスメントセンターが行う教育的配慮が必要な児童生徒のアセスメントと学校支援、③大学との連携による定時制高等学校における特別支援教育、④教員補助者の教室支援の視点と実践が含まれた。 |
| 6. 研究費の取得状況 | | | | |
| 1. 中学生を対象とした縦断的方法による心理的状態の安定性と抑うつ症状との関係 | 単 | 2024年4月～2026年度 | 科学研究補助金 基盤研究(C) | 中学生を対象として、心理的状態についての高密度の縦断データを収集し、その安定性や変動性と抑うつ症状との関連を検討することを目的とする。抑うつ症状の発生を予測する心理的状態の変動パターンを明らかにし、早期の予防的支援につながる知見を得ること |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---------|----------------|------------------------------------|--|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 6. 研究費の取得状況 | | | | |
| 解明 | | | | を目指す。 |
| 2. 親子相互交流療法 (PCIT) による親子関係の変容プロセスの解明 | 共 | 2024年2月 | 一般社団法人 北村メンタルヘルス学術振興財団 | 研究代表者 親子相互交流療法 (PCIT) による親子の相互作用について、支援経過に伴う変容のプロセスを解明することを目的として研究を行う。親子関係の詳細な変容プロセスを明らかにすることで、PCITの作用機序や、ケースによる変化の多様性・個別性の解明を目指す。 |
| 3. 縦断研究による胎児期から成人までの個体・環境要因と青年期の社会的行動との関係解明 | 共 | 2023年4月～2025年度 | 科学研究補助金 基盤研究 (B) | 研究分担者 (研究代表者：河合優年) コホート研究において、母子の相互作用の行動観察結果と後の子どものQOLや社会性発達との関連を検証する役割を担っている。 |
| 4. 放課後等デイサービスにおける発達支援システムの構築と検証 | 共 | 2020年10月 | ニッセイ財団 2020年度 児童・少年の健全育成実践的研究助成 | 研究代表者として、ポジティブ行動支援を基盤とした発達支援システムを放課後等デイサービスに構築し、提供する支援プログラムの継続的改善を図ることにより、職員の専門性の向上および利用する児童のソーシャルスキルの習得促進への効果を検証した。 |
| 5. 発達障害がある就労者へのストレスマネジメント講座 | 共 | 2017年12月 | 公益財団法人みずほ福祉助成財団 平成29年度「社会福祉助成金」 | 研究代表者として、発達障害者支援センターにおいて、就労している成人期の発達障害者を対象とした認知行動療法に基づくストレスマネジメント講座を実施し、効果の検証を行った。プログラム立案から資料作成、講座の分担実施、結果データの分析、事業完了報告書の執筆を行った。 |

| 学会及び社会における活動等 | |
|---------------|--|
| 年月日 | 事項 |
| | 日本特殊教育学会 日本教育心理学会 日本自閉症スペクトラム学会 日本認知・行動療法学会 日本発達心理学会 |